

Newsletter

April 2006

<http://www.aack.or.jp>

目次

アフリカ縦断の旅 第一部	田中二郎 …… 1
雲南懇話会 第一回 Field Work 報告	
梅里雪山周辺の氷河と環境変化	安仁屋政武 …… 9
「明永村、雨崩村を訪ねて」	泉谷洋光 …… 12
AACK 人物抄	
細野重雄さん（一九〇八～一九五八）	平井一正 …… 12
五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって（その三）	
第二次計画 知床五〇周年	斎藤惇生 …… 15
「OKK ニュース Note」について	寺本 巖 …… 19
嘉友岩倉哲男会員を悼み偲ぶ	松浦祥次郎 …… 21
理事会議事録	…… 23
日本山岳協会・山岳共済への加入のお礼とお願い	…… 24
「雲南懇話会」報告とフィールドワークの予定等	前田栄三 …… 24
会員動向	…… 25
編集後記	…… 26

アフリカ縦断の旅 第一部

田中二郎

一九六六年以来、四〇年間通いつづけたアフリカ大陸を縦断するのは、長年の夢であった。人類学の研究のためには、ひとつの村なり町なりに住み込み、長期間じつくりと腰を落ち着けて、人々の生活環境、社会のなりたち、人間関係、行動様式、世界観、自然観、呪術宗教、風俗習慣などを観察し、人々の中に溶け込んで、異文化を理解することが必須である。ある地点に照準を合わせ、対象社会の全体像を把握し、これを自文化およびその他の文化と比較することにより、人間理解を目指すそうとする。したがって、長年アフリカに通い詰めても、行き先はどうしても狭い点に絞られてしまうのである。私は主としてカラハリ砂漠のブッシュマン（サン）を研究対象とし、七〇年代には、ケニア北部の遊牧民、トゥルカナ、レンディール、ポコットを調査研究の対象としてきた。比較のためにコンゴのピグミー、タンガニイカ湖畔のチンパンジーと焼畑農耕民トングウエ、ザンビア北部の焼畑農耕民ベンバ、マリ共和国

のドゴン、モロッコのアラブの都市を訪れたが、これらはいずれも短期間の定点観測にすぎなかった。

このたびの縦断計画の実現は、笹谷哲也ベベさんの誘いによるものであった。「おい、ジロー、アフリカ縦断をやらへんか」と言い出したのは一昨年の秋のことだったと思う。私は即座に「よっしゃ、行こう」と返答した。

出発準備

当初、私たちは、ベベ夫妻、ジロー夫妻の四人で気楽にのんびりと旅行することを考えていた。中高年の長旅を支えてくれる杖がわりに、若いアフリカ経験者の同伴が欲しかったが、定員五人の四輪駆動車に目いっぱい五人乗れば、後部座席には三人座らなければならず、二ヶ月の縦断旅行にはあまりに窮屈すぎると思われた。

ベベさんから企てを聞きつけた野村高史ズッパさんが是非とも参加させて欲しいと言いつつ、それならいっそのこと車を二台にして、役に立ちそうな若者に同行してもらおうと話が進められた。ズッパさんは六月一杯で会社を退職し、七月からはフリーになるというので、暇人となった五人で具体的な計画を練っていた。ベベさんは一九五七年、ズッパ

さんは一九五八年、私が一九五九年にそれぞれ入部と、一年違いの年齢であった。

車は、ランクルかハイラックスかパジェロかと迷ったが、使い慣れたハイラックス、ツインキャブの荷台にキャノピーをつけ、ルーフィヤリヤーを付けたものと決めた。

南アフリカのケープからエジプトのカイロまで、というのが、最初の考えであったが、途中のスーダンが紛争中で通過困難と判断し、ケニア北部のトゥルカナ湖までで今回の計画は終了することにした。

ルートの選択と若い学生の人は、私に一人任せられた。二台の車に八人の乗車が可能なので、三人の若者をアフリカセンターの大学院生の中から選ぶことにした。彼らもまた、それぞれの研究テーマにしたがってフィールド調査を行っているが、定点観測であることに変わりはなく、アフリカ大陸を広域に見てまわることが、彼ら自身の視野を広め、自らの研究にフィードバックさせて深みを与えるのに役立つにちがいない。結局、ブッシュマンの最近の社会文化変容を研究している私の直接の指導学生であった丸山淳子さん、ザンビア西部の村で農耕を営むアンゴラ出自の人々の生活を調査している村尾のみこさん、ナミビア北部の農耕民オヴァンポの樹木利用を調査している藤岡悠一郎君の三名に同行してもらうことにした。藤岡君は車の運転にも慣れていて、一台はズッパさんと藤岡君が交代で運転し、もう一台は私が受け持った。このアフリカ縦断旅行の留守本部は、私の二学年後輩にあたる島田喜代男ケロさんをお願いする

ことにした。

レンタカーのハイラックスをヨハネスバークで調達し、これですべてアフリカ最南端のケープ・アグラスまで南下し、そこから選びぬいたルートをたどってケニアまで北上する。車の調達は、トヨタのディーラーを住商がやっている関係で、ズッパさんが受け持った。

アフリカセンターの教員、院生の、それぞれの地に詳しい連中に情報を得ながら、そして私の経験と記憶を頼りに旅程を組み上げていった。興味あり見るべきところを網羅していったが、もつとも留意した点は安全面であった。アフリカ諸国には、内戦、経済破綻、治安悪化などを抱えている国、地域がたくさんあり、盗難や強盗に遭わないルートを選ぶのに苦労する。ジンバブエはきれいなところが多く、グレート・ジンバブエ遺跡などはみなさんにも是非見せてやりたかったけれど、経済が破綻し、治安もよくないし、なによりガソリンが手に入らないというので、今回の旅では割愛せざるをえなかった。

ドラッケンスバーグ山塊

二〇〇五年八月二五日、ヨハネスバークに八名全員が集合、車の調達と装備、食料などの買出しに三日を費やした。レンタカーのアレンジや日本食の調達には、住商ヨハネスバーク駐在の養口建所長と木村英樹さんにぜひぶんお世話になった。八月二十九日にダーバンへと向かう幹線道路N3を南下、エスコートから西へと折れる。アフリカのスイスといわれる高原の国レソトとの国境沿いにドラッ

ケンスバーグと呼ばれる三〇〇〇メートル級の山塊があり、南アの登山界のメッカとなっている。私たちは、この山塊の麓にあるリゾート地、ジャイアンツ・キャッスルのしゃれた山小屋(chalet)に投宿した。山小屋とはいつても、ツイン・ベッド・ルームにキッチン、シャワー、トイレ付、大きなテラスがあつて、このテラスの椅子に座りながら、渺茫と連なる山並みを見晴らすことができる。この旅行では、ほとんどのところでツイン・ルーム四つに八人が分宿したが、その割り振りは、つねにベベ夫妻、田中夫妻、ズッパ藤岡、丸山村尾というコンビであった。中央に位置するベベさん夫妻のキッチンを使って、初めての夕食を準備する。シェフは当然のことながら、料理自慢のベベちゃん。命じられるままに、ジャガイモの皮をむいたり、野菜を刻んだり、皆が手伝う。テラスにテーブルを二つ出し、椅子を八脚持ち寄つて、冷たいビールとワインで豪華な夕食。スコッチ・ウイスキーの水割りやジン・トニックをちびりちびりと舐めながら、暮れなずむ山々の空気を満喫した。

翌日はおよそ三キロ先にあるブッシュマンの壁画を見学に行く。なだらかな斜面をたらだらと登っていくハイキングコースとなっている。数千年前に描かれた壁画は、一五世紀ごろこの地に進出してきたズール族によって駆逐されたブッシュマンが遺した貴重な文化遺産である。いたずら防止のため、厳重に柵で囲われていて、ガイドの若い女性が鍵を開け、描かれた動物や人物像の説明をしてく

れる。オーバーハンクした大岩のそこかしこに絵は描かれており、その前面の広場に復元されたブッシュマンの実物大の模型が配置されて、昔の生活の様子を示している。山中の野外博物館となっているのである。

帰りは谷沿いに作られた小径をたどり、宿舎の近くのピクニック・サイトで昼食とする。借りてきた車はエアコン付で、これから夏に向かう南部アフリカの旅には快適だ。その一台には冷蔵庫を設備してもらった。いつでもどこでも冷たいビールが楽しめるというのはもちろんのことだが、最高の威力は生鮮食料を持ち運べることであった。三日に一度ぐらいのペースで食料の補充を行ったが、この小さな冷蔵庫に真空パックのハム、ソーセージ、ベーコン、トマト、キュウリなどを入れておいて、これらを材料に、お昼は道端に車を停め、サンドイッチとミネラルウォーターでお腹を満たした。

年寄り五人は、昼食後小屋に戻ってゆつくりするが、若者三人は、往復三時間ほどの道のりを展望のよい丘までさらに足をのばす。三〇〇メートルの稜線まで登るには、最低一泊二日の本格的な山登りが必要で、それはわれわれの今回の目的ではなかった。

売店で冷えたビールと水割り用の水を仕入れ、その夜も豪華な晚餐を山のシルエットと満天の星空を眺めながら堪能した。

アフリカ最南端を目指して

N3ハイウェイに戻り、一路ダーバンへと南下する。ダーバンは、ケープタウンとなら

んで、昔日本の捕鯨基地ともなった大きな港町である。インド人が多いので、ガイドブックで旨そうなカレー屋を探して昼食とする。インド洋に面した熱帯海岸のダーバンは常夏の地だとばかり、私は思いこんでいたのだが、八月末の南緯三〇度は海拔〇メートルでも結構寒いところであつた。考えてみたら私が昔三度ばかり訪れたのは、一二月、一月、二月の真夏の時期ばかりだったのだ。

ダーバンから道路はN2と変わり、これがケープタウンへと続いている。途中内陸部を通過するが、イーストロンドンにて海岸線にでる。道は南西へと向かい、ポートエリザベスからきれいなインド洋を左手に望みながらモッセルベイに至るあいだはガーデンルートと名づけられているぐらい、眺めのよいリゾート地帯である。気温は低いが、インド洋の海水は暖かく、泳げないこともない。海岸線から鯨が潮を吹いているのが見えることもあるが、残念ながらわれわれは見ることができなかった。

モッセルベイからケープタウンの中間にあるスウェレンダムの町からN2を逸れ、南への道をたどる。その行き着く先がケープ・アグラスである。南緯三五度、この地点こそがアフリカ大陸の最南端だということを知っている人は意外に少ない。メインロードから八〇キロも外れた小さな漁村であり、灯台と小



アフリカ縦断の出発点ケープ・アグラスにて全員の集合写真。左から笹谷ベベ、村尾、笹谷アサミ、野村ズッパ、藤岡、丸山、田中憲子、田中ジロー。

さな土産物屋がわずかにあるばかりで、訪れる人もまばらである。ケープタウンの町からほど近い喜望峰が、一四八八年、ポルトガルのディアスが発見し、一四九七年にヴァスコ・ダ・ガマがこの岬を通ってインドへの航路を開いた地点としてあまりに有名だからである。

私たちは岬の突端でしばらく遊び、近くの食堂で昼食をとった。いよいよここがアフリカ縦断の出発点なのである。途中のブレダス

ドルプから北西へ近道をとってN2まで引き返し、ケープタウンの街中に到着した。九月三日のことである。

ケープからお花畑へ

ケープタウンで休養を兼ねて三泊し、せっかくの機会だから喜望峰を見学した。いよいよインド洋をあとにし、大西洋側にまわってきたことになる。ケープ半島の東側海岸にはペンギンの繁殖地があり、子育てにいそしむ姿や、海中で魚とりをし遊泳するペンギンの群れをしばしばたずんで眺めていた。

大西洋側には、南極からベンゲラ海流が北上してくるが、これはとても冷たい寒流であり、ケープ州からナミビア西海岸は、この寒流の影響で大気が冷やされ、よく霧が発生する。濃霧による海難事故が相次ぎ、ケープ・アグラスからナミープ砂漠の海岸にかけておよそ五〇〇隻の難破船が座礁していると言われている。ケープタウンの町はインド洋の暖気と大西洋の寒気のはざまにあり、おおむね穏やかな気候に恵まれているのだが、南西風が吹くときには寒気をもろに受けてとても寒くなる。冬が去り、初春を迎えたこの時期にも、私たちが滞在したときには結構冷え込み、べべちゃん「パッチがいるやんけ」と大騒ぎした。

有名な観光名所、テーブルマウンテンには雲がかかり、ケープブルも運休していて登ることはできない。急峻な崖の隙間を縫って登山道が作られているが、何時間もかかって上ってみても、見晴らしはまったくきかず、徒労

に終わるだけであろう。前大統領のマンデラさんが二八年間拘禁されていたロベン島もまた霧の彼方である。

比較的新しく作られたショッピングセンターであるウォーターフロントで、べべさんのパッチ、ズッパさんのサファリ・ジャケットなどを買い物し、そして中国人の経営する回転寿司屋で昼ご飯にした。目の前で獲れたばかりの新鮮な魚介類、アボガド、カリフォルニアロールなどバラエティーに富んだお寿司は久しぶりのせいもあって本当においしかった。

九月六日、ケープタウンからN7道路を六〇〇キロ北上し、スプリングボックに着く。町外れのモーターに二泊、この付近がお花畑の名所である。地中海性気候で冬雨型のケープ州は、冬が終わるようやく短い春の季節に入っている。雨の多い年にはこの時期平原を埋め尽くすお花畑となるのだが、今年はいよいよ雨が来なかつたらしい。道路沿いの花はそれほどでもなかつた。しかし、モーターの人に教えてもらい、数十キロ南へ戻ったナマック国立公園の中へ行ってみると、そこは見晴るかすかぎり、山野草のお花に覆われつくしていた。車を止めるたびに、ポケット・サイズのデジカメで道端の花を撮りながら旅してこられたべべ夫人、アサミさんは大喜び、大活躍での散策となった。黄色、赤、紫、青と色とりどりの花々は、キク科の植物が多いが、いずれも乾季の乾燥に耐えるため多肉植物となつている。ガーベラをはじめとして、日本に輸入される園芸植物には南アのこの付近の

ものが多数ある。

フィッシュリバー・キャニオンからナミープ砂漠へ

その昔、ブッシュマン、コイコイ（ホットントット）が生活の拠点としていたオレンジ川でナミビアとの国境を通過し、南アをあとにする。オレンジ川の支流であるフィッシュリバーは、何億年にもわたって侵食が進んだ、北米のグラランド・キャニオンに次ぐ世界第二の大渓谷である。その渓谷の谷底には温泉が湧き出ており、バンガロー、キャンプ・サイト、温泉プールを備えたリゾート地がある。私たちはそこに一泊し、午後のひとときをのんびりと過ごした。谷沿いに約四〇キロ、五日間をかけてトレッキングするコースが開かれているが、谷の中とはいえず、日差しは強く、危険も大きいので、もちろん公園事務所に許可を取り、ガイドを連れて行くことが義務付けられている。

さて、いよいよこの旅行の目玉の一つであるナミープ砂漠に分け入ることになる。およそ一五〇キロの幅をもち、南北二千キロメートルにおよぶ海岸砂漠は、ベンゲラ寒流がもたらす偏西風によって、海岸の細かい砂を絶え間なく陸地へ吹き飛ばし、世界最大の砂丘を形成する。砂丘の最大の高さは三〇〇メートルにも達するといわれている。

砂漠の東の端に位置するセスリエムのテント・ロッジで朝食のお弁当を用意してもらい、暗いうちに出発する。六時に公園のゲートが開くのを待ちかねて、ツァウチェブ川



砂丘の頂上まで着いて、やれやれと休憩する。うしろの窪地はソッサスフレイ。前からアサミさん、ズッパさん、藤岡君、ベベさん、憲子、丸山さん、村尾さん。田中二郎撮影。

の涸れ沢に沿って六〇キロ、砂丘地帯の真つただ中へと車を西へ走らせる。午前七時、干上がったソッサスフレイの平らな窪地で川筋は突如として砂丘の連なりに行く手をふさがれ、消滅する。東部の中央高地に二〇―三〇年に一度大雨が降ったときには、この谷に洪水が押し寄せ、ソッサスフレイには水が湛えられる。これより西の大西洋岸に至る約一〇〇キロは重畳たる砂丘の連なりである。アフ

リカ大陸の西端にあたるナミープ砂漠の日の出は遅い。砂丘の麓に車を止め、手近な砂丘の頂上を目指してゆつくりと歩を進めた。柔らかい深い砂は一步ごとに潜っては半ばずりおち、新雪のラッセルより余程始末が悪い。私たちが一時間かけて登った砂丘の高度は一五〇メートルぐらいだろうか。朝日の中に、山稜のシルエツトがくつきりと浮かび、山肌の起伏の陰影を優しく描きあげている。赤みを帯びたオレンジの山肌は、やがて陽が高くなつていくにつれ、柔らかいベージュの曲線へと移り変わる。夜露にしつとりと濡れた砂が、強い日差しを受けてまたたく間に乾いてしまうと、絶え間なく吹き付ける風が極細の砂粒を巻き上げ、山並みは砂嵐の霧に包まれる。

砂と礫と岩石の砂漠が、二千年にわたつて海とせめぎ合う世にも珍しいナミープの自然は、生き物たちの世界にも数々の奇跡を生み出している。生存に必要な水分をいかにして手に入れるかが、どの砂漠にも共通する生き物たちの適応の智恵の出どころである。

ナミープ固有種で最も有名なものは、逆立ちをして霧を集める甲虫の一種オニマクリス・ウングイキュラリスである。この虫は、

日中活動して砂表面の有機物のかけらを採食するが、夜間は砂丘の急斜面にもぐつて休む。真夜中から早朝にかけて、深い霧が垂れ込める時刻に表面に抜け出て、ゆつくりと稜線の近くまで登り、そこで身を翻し、風に向かい合つて長い後足を伸ばし頭を下げる。背中で受け止めた霧が、水滴となつて頭部へ流れ落ちてくるのを飲料とするのである。

植物の中にも摩訶不思議なものがある。松ヤソテツなどと同じ裸子植物で、形は巨大なオモトのような代物である。短い茎の先に二枚の巨大なコンブのような葉がうねりながら地上を這っているが、この葉は種子が発芽したときに出る二葉(子葉)である。普通の植物のように本葉が出てこないで、二枚の子葉がいつまでも成長を続けるのである。一千年以上生き続けるといわれており、最も大きなものは周囲五メートル、根は二〇メートルにも達して水分を得ている。発見者であるオーストリアの植物学者ヴェルヴィッチの名をとつて、属名をヴェルヴィチア、種小名をミラピリス(奇跡的な)と名付けられている。植物自体がまことに奇想天外なものであるが、和名として付けられた「キソウテンガイ」の命名もまた、仰天するにたる奇想天外な名付け方である。

スケルトン・コースト

大西洋海岸の素敵な港町スワコップムントからアンゴラ国境までのナミープ砂漠北半部の海岸線はスケルトン・コースト、つまり骸骨海岸といわれて昔から恐れられてきた。こ

のあたりは特に霧がよく発生し、一日の大半が濃霧に覆われている。しかも、スワコップムント周辺の一〇〇キロ前後を除けば、それから北の一キロ近くは全くの無人地帯なので、霧にまかれて座礁した船は助けを求める手段もない。

スワコップムントから約一五〇キロ北におよそ一〇万頭のアザラシが営巣する繁殖地があり、ここはまた、一四八六年に初めてのヨ



スケルトンコーストの濃霧にまかれて座礁した難破船。今日は霧はかかっていないが、大西洋の沖合いはどんよりと曇っている。

ロッパ人、ディオゴ・チャオがナミビアに上陸した歴史的な場所でもある。いまでは海岸沿いに車道が走っていて、国立公園になっているが、許可を得、入場料を払っても、一般人が行けるのは三七〇キロ地点のテラスベイまでである。ここにもツイン・ルームのバンガローがあり、レストランが付設されている。ここはまた、釣りの名所としても有名であり、私たちも大物釣りに期待をかけて地の果

てのようなこの場所までやってきたのである。私たちはスーツケースに入るていどの小さな折りたたみ竿を持って来たが、これはなんの役にも立たないことがすぐ分かった。公園の従業員たちの使っている竿は、まるで物干し竿ほどもある長い丈夫なもので、太い道糸の先に三〇〇グラムぐらいの重い錘をつけて、三、四メートルの沖合いヘリールで飛ばしているのである。従業員の一人に交渉して、三本の竿を借りることができた。売店で冷凍の鯛を餌として購入し、着いたその日の夕方、とりあえず、若者三人と私の四人で試し釣りに出かけた。藤岡君と私が竿を振るったが、結構の手ごたえがあり、釣果はまずまずであった。カベリユールという五〇センチぐらいのアマダイに似た形の魚が旨いと聞いていたが、最

初に釣れたのがそのカベリユールだった。そのあとは二〇センチから四〇センチぐらいの鯛の一種ばかりで、五、六匹があがってきた。お年寄り方に心配させてはいけないので、早めに引き上げ、その夜はとりあえず大型の鯛を一匹刺身におろして、わさび醤油で食前酒のおつまみとし、残りはバンガロー備え付けの冷蔵庫に保管した。

翌一四日は朝から全員で釣り場へ行き、交代で竿を使いまわしながら、二〇匹ほどの鯛を釣り上げた。全員が少なくとも一匹は獲ることができたのは幸いであった。

その日のお昼は鯛とそして昨日ただ一匹だけ釣りあげたカベリユールを刺身におろし、野菜のつけ合わせを添えて昼食とした。残りの一〇数匹は開きにして塩を振り、天日で干魚にした。この干魚は、その後の道中で、貴重な酒の肴となり、ご飯のおかずとなった。

石化木の森とトウイフェルフォンテインの岸壁画

九月一五日、テラスベイから六〇キロ引き返し、トーラベイのキャンプ・サイトより、内陸へと向かう砂利道を東へと走らせる。海岸から一〇キロも離れると、霧は晴れ上がり、乾ききつて日差しが強い砂漠の酷暑へと気候は急変する。およそ三〇〇キロで今日、明日の宿泊を予定しているダマラランドの中心地コリハスに到着する。

私たちは途中、石化木の森を訪ねた。およそ二億六千万年前、この地域がより湿潤だったころ、直径一メートル近い松柏類の大森林

が洪水のためこの地に流れ着いて土砂に埋もれ、珪素が樹木の細胞と入れ替わって化石となった。二億年も経ってから再び洪水にさらされて、表面の土砂が流され、化石の樹木があらわとなったと考えられている。一部だけが露出しているもの、全体が露出して横たわっているものがあり、また、ばらばらに砕けて小さな破片となつて砂の地面に散らばっている。大きな石化木は長さ三〇メートルにおよぶという。八〇〇メートル×三〇〇メートルの範囲に、これらの石化木が無数に広がっているのである。

コリハスのレスト・キャンプには、キャンプ・サイトの他に、ツインのコテージ、ツイン・ルームを二部屋備えた四人用の豪華なバンガロー、レストラン、売店、プールと芝生の庭が設備されている。私たちは四人用バンガローを二軒借り、朝食だけはレストランを利用したが、夕食はべべちゃんの指揮のもと、冷蔵庫つきのキッチンで、日本風あるいは中華風のご馳走を作ることが多かった。昼食はもちろんいつもどおりのサンドイッチである。午後のひとときは、フィッシュリバー・キャニオン以来久し振りにプールで汗を流した。

翌日は石化木の森への道に戻って、それから南下し、トゥイフェルフォンテインへとドライブする。ブッシュと草原の中を走ると道端に古い砂漠象の糞が落ちていた。普段はもう少し西の川辺林を中心に住んでいるのだが、稀にこちらまで出てくるのであろう。フォンテインとは、アフリカーンス語で泉であ

ることからも分かるように、トゥイフェルフォンテインには断層崖の麓に小さな湧き水があり、これを利用して昔ドイツ人の農夫が牧場を経営していた跡地である。崖を一段登ったテラス沿いの大きなスラブの岩肌、六千年前には住みついたと思われるブッシュマンが残した壁画が二五〇〇点以上存在する。色彩を使った絵画も若干は見られるが、ここに残された芸術の特徴は、それらの大半が鑿で削りこまれた、いわゆる刻画だということである。普段人々は平原部に住み、狩猟採集生活を営んでいたであろうが、芸術を好んだ一部の人たちが余暇の合間に彫刻にきたり、祝祭や儀礼の際に皆でテラスに集まり、刻画を刻んだりしたことであろう。キリン、クドゥやエランドなどのアンテロープ、象やライオン、蛇などの爬虫類、ダチョウなどから、おそらく彼らの宗教的信仰にかかわると思われる架空の動物まで、さまざまな造形が遺されている。

ヒンバランドからオヴァンボランドへ

いよいよ明日からマラリア汚染地帯に入るので、コリハスを発つ前日、九月一六日の夜からマラリア予防薬マラロンの服用をはじめた。マラリアは熱帯アフリカの病気の中でもまだ一番罹りやすく、また恐い疾病である。とくに熱帯熱マラリアは死亡率も高い。薬の普及により、クロロキンなどの抗マラリア薬は耐性マラリアができてしまっていて、ほとんど効果がなくなっている。マラロンは最新の開発薬で、まだその耐性は報告されていない。

い。それでも方が一罹病した場合に備えて、私たちは中国で開発された最高の治療薬といわれるコーテキシン（コアルテムの名で市販されている）を必要量だけ持つていった。日本ではこうした薬は手に入らないので、私たちはヨハネスバーグやナイロビであらかじめ入手しておいた。

コリハスからカマニャーブ、セスフォンテインを経由し、ヒンバ族の中心地オプオまでは約七〇〇キロの道のりである。カマニャーブから舗装は切れ、砂利を敷いた道になるが、ナミビアの道路はよく整備されていて、時速一〇〇キロのスピードでまだ午後早い時間に目的地に到着する。最僻地のひとつであるオプオにはカトリックの教会があり、そのゲストハウスで蚊に攻められながら一夜を明かす覚悟をしていったのだが、なんとまあ、この片田舎に新しく立派なロッジが出来上がっているではないか。ヒンバランドを一望の下に見渡せる小高い丘の上に、実に贅沢なりゾー・ホテルが建てられていた。まだオープンして二、三週間しかたっていないという。丘の頂上にあるレストランの目の前にはプールまで作られていてきれいな水がふんだんに循環し、滝となって流れている。

ヒンバはヘレロ族の一分派であり、共に牛遊牧民であるが、ヘレロがいち早く毛皮の衣類と頭飾りを洋風に取り入れたのに対し、ヒンバは伝統的な毛皮の衣装を身にまとい、女性は真っ赤な泥とバターを混ぜた顔料を身体中に塗りたくって、八頭身のスマートなからだを際立たせている。ヘレロが南へ東へと広

く分布を広げ、強大な武力を誇って一時はドイツ軍とヘレロ戦争を戦ったのに対し、ヒンバはナミープ砂漠の東縁部の辺境に取り残され、ほそぼそと牛の放牧が続いている。このヒンバの生活、とくに伝統的に正装した美しいヒンバ女性を見学する観光客は年々増えてきており、彼らの需要を満たすために新たにホテルが建設されたのであろう。

オポオからアンゴラ国境のルアカナに向かつて、北上する。オヴァンボランドに通じる舗装道路に着いたところで、やれやれと一休みする。「あれ、変な音がする」藤岡君が大きな声で叫ぶので、近づいてみると、左後輪からシューと空気の漏れる音、初めてのパンクであった。見る見るうちにタイヤがべっちゃんこにへたばってしまった。スペアタイヤは各車二本ずつ積んでいるので、早速交換をする。点検してみると、直径一センチぐらいの石が刺さっていた。前輪で寝ていた石を起し、鋭利に尖った先端が立ち上がって後輪に突き刺さったのである。チューブレスタイヤに六ミリ以上の裂け目が出来たら修理不能である。オヴァンボランドの中心の町オシヤカティで新品のタイヤを求めなければならぬだろう。行程はまだ距離にして三分の一しか来てないし、道路事情はこれからますます悪くなるのが予想されるのである。

オヴァンボランドはナミビアでも一番の人口密集地帯である。ジャケツイバラ科の堅い樹木、モパネの林が優占し、ところどころに椰子が混じる。オヴァンボはこのモパネ林を切り開いてトウジンビエなどの作物を作る農

耕の民である。藤岡君は地理学を学んできたが、この土地の人々の樹木利用を中心テーマに調査が続いている。私たちはまずオシヤカティのこじんまりしたサントニーニ・ホテルに行き、年寄り五人分の部屋を確保する。若者たち三人は、藤岡君が調査している村に泊り込みたいという。村は約一〇キロ離れたところで、車で一走りなので、全員で見学に行く。藤岡君が泊り込んで世話になり、いろいろと情報を提供してもらっているのは、村の有力者の家で、トタン葺の方形の母屋のほかに、キッチン、酒の醸造所、物置など、丸い草葺の小屋を四つばかり備えた立派な屋敷であった。小屋の建材はモパネである。モパネは堅くてシロアりに食われないので、周りの屋敷囲いなど、さまざまな用途に使われる有用材であり、また薪としても重宝される。ご主人は不在だったが、奥さんにトウジンビエの酒を振舞われ、娘さんに屋敷内を案内してもらおう。三人を村に残して、年寄り組はホテルへと引き上げる。ズッパさんはここで初めて一人でシングル・ルームに休むことになった。

翌朝、教えられたタイヤ屋へ出向き、パンクしたタイヤを取り出して修理を頼むが、ホイールをはずしてみると、長さが三センチもある尖った石が刺さっていることが判明、新品のタイヤを取り付けてもらう。村から帰ってきた若者たちと合流したが、彼らは町に入ってから人混みの多い路地に駐車した際、窓ガラスを割られたとってしよんぼりとしていた。丸山さんのハンドバッグを盗られたらしいが、中には貴重な物が入っていなかった

ので、幸いであった。ガラス屋を探したが、ハイラックス用のガラスはなく、とりあえずプラスチックを切り取って窓にはめ込んでもらい、急場を凌ぐ。どこへ行っても田舎のんびりとしているが、都市部は、スリ、窃盗、強盗と油断も隙もない。(第一部 完)

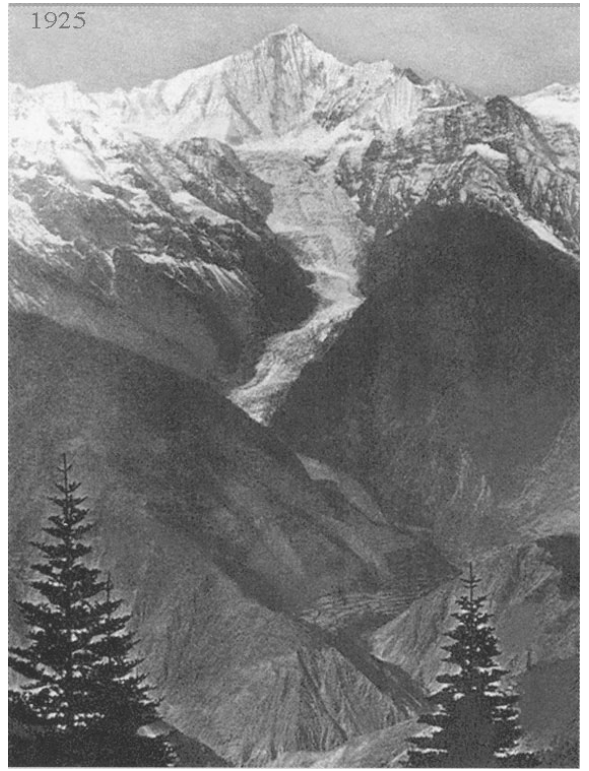
雲南懇話会 第一回 Field Work 報告

梅里雪山周辺の氷河と環境変化

安仁屋政武

一九八九年の第一次日中友好学術登山隊へ学術隊員として参加して以来、今回二〇〇五年一〇月〜十一月、小林尚礼さんの案内で一六年振りに梅里雪山地域を訪れた。今までもその気になれば行くチャンスがないことはなかったが、いろいろな理由からその気になれなかった。二〇〇三年十一月、学会で昆明に行ったときも足を伸ばさなかった。今回は雲南懇話会が発足し、その第一回のフィールドワークということもあり、思い切って参加した。

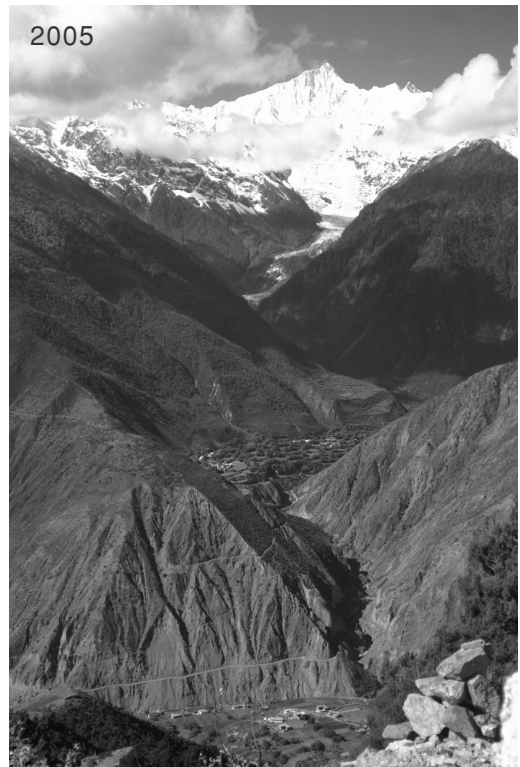
一〇月二五日、日の出はダメだったが、九時前飛来寺の先の展望台で少し雲が懸かっていたが、梅里雪山と氷河が見えた。雨期後、初めてだという。ここで慰霊碑にお参りする。銅版に刻まれた日本人隊員とチベット人隊員一人の名前が識別しにくい程、傷つけられているのが痛々しかった。傷つけられた時期から推して、多分靖国神社参拝問題に端を発し



明永氷河1925年（Joseph Rockによる）



同 1989年10月14日



同 2005年10月25日

た日本（人）への感情悪化の結果ではないかと思う。一国の首相の無神経さ、無配慮さがこんな山奥の神聖な場所にまで影響しているのかと思うと、悲しかった。また、このごみの散乱はすごいもので、聖山を眺める場所にしてはあまりにも汚いとの印象であった（もちろん、一九八九年はそうではなかった）。山を見、写真を撮っている間、一六年前のことがいろいろと思い出され、蘇ってきた。

日程は主として、遭難遺体が発見されている明永氷河の麓にある明永村と、二次隊・三次隊が入山ベースに使った雨崩村を訪れるものであった。一九八九年の二ヶ月近く滞在した明永の隣村斯農に行けなかったのは残念であったが、限られた日数では仕方なかった。明永村は一九八九年一月に私一人で地形・氷河調査に一週間程度入った村で懐かし、当時のことが思い出された。しかし、話には聞いていたが、その変容振りは私の想像をはるかに越えるもので全く驚いた。二〇〇三年の世界遺産登録により観光客が激増し、舗装した立派な車道・駐車場が完備され、景色は一変していた。車からではあるが、ほとんど変わっていないように見えた斯農村とは非常に対照的である。なかでも度肝を抜かれたのは太子廟（当時は雪山寺と聞いた）から上に延びる氷河見学のための空中回廊で、世界遺産指定の功罪をここでも見た思いがした。一九八九年当時、天安門事件の直後だったので、明永村へ一人で行ったとき、極力村人とは会わないように人家から遠く離れた村外れの、太子廟への巡礼道に近いところにあ

るモレインの上にテントを張った。これは尾根を越えた隣村のB日と無線で安全確認の交信するためであった。この時、偶然通りがかった若者がモレイン上の壊れた扉の上にアンテナを立てるのを手伝ってくれた。どうやらこの時の若者が現在の明永村の村長さんであるらしいことが、今回分かった。こうして誰のなんの案内もなく、地図もない全く未知の地域を一人でフラフラ歩き周り、地形を見て道を探しながら調査した。今回のガイド、小林さんから「一人で怖くなかったか」と聞かれたが、当時全くこのようなことは考えなかったし、実際怖いと思ったことはなかった。

ということ、今回一六年前に撮った村と氷河の写真と比較のために持っていた。明永氷河は写真と比較すると後退、表面低下が確認できた（小林さんの話によると、一九八八年頃から末端は一五〇mぐらい後退しているそうだ）。一九二五年のJoseph Rockの写真（出典、三江併流、雲南美術出版社、二〇〇〇）、一九八九、二〇〇五の三枚の写真を比較すると、下流域で右岸に岩が顕れたのが特に目を引く。明永村の村長さんの話によると、この氷河は短期間で前進・後退の変動が激しいとのことである。モンスーンの影響が大きいからであろう。後日、帰国してから隣の氷河（斯農氷河と今は呼んでいる）について一九八九年と二〇〇五年の写真を比べたところ、ほとんど変化していなかった。さらに一九二五年にJoseph Rockが撮った写真と比較したところ、明永氷河も斯農氷河も一九八九年には縮小していた。二つの氷河は梅里雪

山の東面に隣り合って涵養域を持つのに、なぜ一九八九年以降の変動傾向がこのように異なるかの理由は、本格的な学術研究を待たなければならぬ。世界ではこのように隣合った氷河の変動が異なる例は珍しくない。

雨崩村は私にとって初めてであるし、あの鋭峰メツモと屏風をナタで割ったような怪峰ジャワリンガの麓にあるという村で、地形とか氷河のことはあまり考えず風景とトレッキングを楽しむ積もりで行った。が、結果的には様々な地形や氷河を見ると、商売が出てくるのはどうしようもなかった。瀾滄江周辺の山々（四〇〇〇m級）の斜面の特徴の一つは、山腹斜面が厚い堆積物（数メートルから一〇メートル以上）に覆われていることである。このような斜面は日本ではあまり見られない。横断山脈も日本も大きな隆起と速い侵食で知られているが、横断山脈でこのように堆積物が厚くなったのは、風化が激しい上高度が低い地域は雨量が少ないからであろう。

雨崩村下村が載っている地面は、その平らなこと、表面に浅い流れがあること（これは下に粘土などの細かい堆積物があること）、谷の出口の上手にあることなどから、昔湖だったと推定できる。また、村の真ん中に直径五mぐらいのやや丸みを帯びた岩石があり、隣に寺が建てられて神として崇められている。ここにこのような巨石がぼつんと一つだけあるのが不思議だという理由だそう。単純に考えると、土石流によって運ばれたと解釈するが、周りに堆積している石を調査しないと断定はできない。しかし、大きな石は家や扉

の建設に使われてしまっているかもしれない。

二次隊・三次隊がB日を置いた笑農は広くて気持ちのいい圏谷底（昔の登山用語ではカールボーデン）である。上を見上げるとすぐ比高数十メートルの左岸のラテラル・モレインが目につく。登山隊はこの裏側を通過して荷揚げしたようだ。この谷の最奥に聖地となっている湖がある。これはカール底に典型的に作られる氷河湖で専門用語ではターン（Turn）と呼ぶ。この池に行く途中の岩丘は見事に氷河でつるつるに磨かれていた。

氷河湖の周りは数日前に降った新雪がまだかなり残っていた。氷河湖の近くでは左岸の大きなラテラル・モレインの内側に植生線があり、この狭い地域で見るとかぎり、少なくとも二回の氷河前進があったことを示している。直感的に（世界の他の地域と照らし合わせて）新しいのは一六〇一八世紀の小氷期のものと考えるが、もちろんこれは単なる推測である。ターミナル・モレインらしきものはカールボーデンの中頃にわずかな丘として残っている。

もう一つの地域、神瀑地域でもやはり左岸に大きなラテラル・モレインがあり、神瀑へ行く道がつけられている。ここの植生は笑農（BH）のものよりも大きい。しかし、神瀑の近くでは植生が全く無く裸地となっている。カール底には雪溪の前面に中央を水流で切られているターミナル・モレインがあり、草が生えている。やはり、最近二回の氷河前進があったことを示している。

いずれも一日のトレッキングのなかでざつ

と観察しただけのことなので、細かい議論はできない。雨崩の他の二つの谷の氷河地形も調べて、年代測定の結果が得られれば、学術的に非常に重要で興味深い氷河に関する研究ができる。

学生時代は無邪気に山へ登って楽しんでいたが、地形・氷河の研究を商売にするようになってから、どこへ行ってもついつくせが出る。地形を見ると、いつどのように形成されたのだろうかとか、なぜこんな形をしているのだろうか、これからのような環境変化が読み取れるのだろうか、等々考えてしまう。習性とは恐ろしいものである。

「明永村、雨崩村を訪ねて」

泉谷洋光

昨年一〇月雲南懇話会は、第一回フィールドワークとして梅里雪山から大理、昆明へのツアーを計画し、私はそのパッチャーに参加しました。永い間私自身、同期の井上治郎達の無念の想いを同感し梅里雪山行きを願っていました。今が今回機会を得て安仁屋政武、前田栄三、西田八州男と共にその想いを実現する事ができました。

一〇月二五日 徳欽を早朝出発しミンヨン村に向かいました。途中飛来寺の峠では雲間に梅里雪山のピークが現れ、同行の小林バコヤシ君から登山ルートの説明を受ける事が出来ました。第二次隊一七名の慰霊碑はこの辺り一面を覆うカシの灌木帯の中で一段高く梅

里雪山が一望できる斜面にあり、私たちは日本から持参の香を焚き火を灯してしばし冥福を祈りました。峠ではチェルテンのそばで折りしも一人のチベット僧がビヤクシンを焚き、白い煙のなかで一心に誦経していた姿が今も目に残ります。ミンヨン村では永年バコヤシ君と一緒に遺体捜索をしていた村長一家と夜を語り合い、翌日もミンヨン大氷河を村長が案内していただき、目前の氷河を大雪崩が轟然と襲った一五年前の井上達の無念を想いました。

ユイボン村シャオノン ベースキャンプとそのうえの氷河湖からはC1、C2、C3へのルートが望まれ登山隊の気持ちの高揚と緊張を想いました。ベースキャンプで私たちはもう一度香を焚き火を灯して一七名の冥福を祈り、この一五年前この地を訪れられた様々の方々の想いを同感し、梅里雪山カワカブへの畏怖と敬虔なる祈りを捧げました。

一〇月三〇日 私達は紅葉に彩られたユイボン村を出発し、快晴の空の下、梅里雪山山群を背に帰途につきました。 以上

AACK人物抄

細野重雄さん（一九〇八〜一九五八）

平井一正

桑原武夫著「チョゴリザ登山」（文芸春秋



社、一九五九)の中の七月二日の記述に、「ポストラナーが手紙を届けてくれた。近藤良夫から細野重雄の急死を伝えてきた。あの元氣な男が。暗然とする。彼は私より二級下だが、鈴鹿や笹が峰へよく一緒に行った。去年久しぶりに酒をのんだが」とある。

私はこの文ではじめて細野重雄さん(以下敬称略)の名を知った。この人物についてはほとんどの人は知らないだろう。しかしAACKの創設にも関係し、三高山岳部の登山史はもとより、わが国の登山史にもしばしば登場する。どういう人であったか、ぜひ知りたいたいと思う、いろいろと人脈を探った結果、幸い細野重雄の長男細野晏雄と連絡がとれ、いろいろな資料を頂いた。他にしらべたことも加えて、細野の人物を紹介する。

一、略歴

細野は一九〇八年(明治四〇年)二月二七日、東京市に生まれた。父親は陸軍少将で、

日清戦争や日露戦争には参謀将校で行ったこともある。師団長も務めた。父の配属の関係で、小学校も北海道旭川、兵庫県篠山、熊本市石台小学校と転々とし、中学も熊本、山口を経て京都一中へと進んだ。

一九二四年三高入学、山岳部で活躍した。二年上に今西錦司、西堀栄三郎がいる。一九二七年三高卒、一九三〇年(昭和五年)京大農学部を卒業、大学院で実験遺伝学を専攻した。指導教授は木原均である。一九三二年外務省在華補給生として採用され、一九三五年結婚後すぐ満州へ。佳木斯、公主嶺などの農事試験所を経て、興農合作中央会指導部農事部長などを歴任した。

終戦となり、ハルピンでソ連兵につかまり、深夜貨車で送られる途中、汽車から飛び降りて逃げた。そしてやっと自分の家の門前までたどりついたとき、運悪く再びとらえられた。牡丹江までつれて行かれ、収容所に送られた。幸い三ヶ月ほどでハルピンに帰ることができたが、そこも立ち退きを命じられ、長春、吉林を経て、大連の反対側の胡盧島まで重いリュックを背負って歩かされた。そして俊子夫人、九歳の長男晏雄の一家三人が無事に博多に引き揚げてきたのは一九四六年九月のことであった。

一九四七年農業試験所に入所、一九五一年海外部長。一九五二年には京大から主論文「耕耘作業機械化の条件」等により農学博士を受け、一九五四年に東京大学講師もつとめた。仕事でも研究でも将来が期待されたが、一九五八年六月二九日狭心症のため死亡。五一歳であった。余りにも早すぎる死であった。

二、登山家としての活動

細野は三高山岳部時代、鈴鹿や比良、大台など近郊の山をはじめとして、笹ヶ峰、北ア、南アなど広く足跡を残している。今西、西堀などが二級上において、登山の仲間には恵まれていた。ちなみに酒戸弥二郎や奥貞雄は同期生である。

特記すべき山行きは一九二六年三月、西堀、今西、酒戸ら七人で行った春の黒部東沢である(文献一)。このとき黒岳はじめ、赤牛岳、野口五郎岳などの積雪期初登頂に成功している。この山行きは当時としては画期的なもので、その後の海外登山の原点とされている。

細野は行かなかつたが、一九二六年七月に今西、酒戸らが奥又白から穂高前尾根にあり、四、五のコルから涸澤ヘグリセードしてクレバスに転落、井上金三が死んだ。細野は井上と同期であり、その追悼を三高山岳部報告五号に書いている。

京大に入ってから活躍は続く。一九二九年七月、高橋健治、酒戸、奥貞雄、細野、竹沢長衛らは、はじめて北岳パットレスの全貌を登山界に紹介した。これは登山史上大きな業績を占めている。そのとき細野は現在のdガリーから第五尾根を登っている(文献二)。さらに一九三一年一月には、西堀、今西、浅井、酒戸、細野、伊藤愿などによる、わが国初めての極地法による富士山登山の隊員として活躍している(文献三)。

このように細野は三高、京大の登山を通じて、明らかにヒマラヤを目指していたと思われる。現に一九三一年のAACKの結成には参画しており、彼自身図書係としてスタッフの一員として名を連ねている(文献四)。

しかしその後に行われた白頭山(一九三四〜三五年)には行っていない。なぜ白頭山登山に参加しなかったのか、今となっては不明だが、仕事のことや父君が一九三五年に亡くなっておられることも関連があるのかもしれない。AACKはその後カブルーやK2などへ計画をたてるが、細野はそれらの計画にも参画していない。また一九四二年の大興安嶺探検のときにも、同じ満州にいたにもかかわらず、表にはでていない。なんらかの情報交換があったと思われるが、詳細は不明である。梅棹忠夫にも確かめたが記憶にないそうである。

学者肌の人でもあり、まじめで清廉潔白な人であったので、大学に残っておられたら、また別の展開があったと残念である。

三、文筆家の一面

細野は農学者であると同時に文筆家であったことが、三高山岳部報告、雑誌「ケルン」、「岳人」などに投稿した何編かのエッセイや翻訳物でわかる。論客であった。

たとえば山岳語彙について、細野は興味ある調査、研究をしている。山岳語彙について彼はこう論じている。「山岳語彙は作者の名が消えたが、伝説化してしまったところの口承文芸である、山岳語彙が言語学や民族学や

人類学という科学の立場から興味あるのは勿論であるが、もっと手近な美しさを感じるの面白い、たとえば同じ対象でも、谷、澤、洞、入など、いろいろと名称があるが、これは山麓の住民が永年これを使用して、山の美を再現してきたところのものであり、それが自然の環境にあつて熟ききっているからである。」(文献五、六)。さらに、英国の山は、地表が植物層などで厚く覆われていない、地形も日本とは違う、比較的人口が希薄である、などということが、山・谷・峠などの命名にいかに関与されるか、など興味ある論議を展開している(文献七)。

またオスカー・エリッヒ・マイヤー(実践登山家としては一流でないが、山に関する作品については評価されている。一九一八年オーストリア山岳会の会誌編集も担当した)の著作を雑誌ケルンに数回にわたつて翻訳している。(因みに細野は学術論文もドイツ語で書いている。三高では理乙であったか)(文献八)。その他アンリー・ポルドーの「野火」を原文で読んだ書評などもある(文献九)。

また大島亮吉や田部重治の登山論を、単独行を焦点にして論じ(文献一〇)、さらに「高橋健治さんの山」として高橋の山に対する思想、登山歴などを発表している(文献一一)。若くして死んだ高橋に対する愛情が感じられ、胸をうつ。高橋の記録は京大山岳部ルーム日記の焼失のために失われたが、細野は今西ら山仲間の記憶を集めて貴重な記録を作った。この他、幅広い見識と知識に裏打ちされた山岳に関する寄稿は多い。山登りだけでな

く、広く山を研究して、文献を調査し、勉強していたことが伺える。

三高山岳部報告には、卒業して京大に行つてからも投稿が続く。とくに報告一一号(昭和九年)には、「エネルギーシユたれ」として、山岳部員は勉強を自分のエネルギーを試す意味でもやらねばならない、大遠征の準備なんかめんどろで、勉強の比ではない、勉強は学問だけではないことをはっきりさせることが大切である、不断の努力を嫌う者は登山精神に反する、として後輩にはつばをかけている。細野はこの頃から海外遠征を視野においていたのであろう。

四、幅広い農学研究者(文献一二)

細野は大変な努力家、勉強家であった。京大時代には木原均研究室で小麦の遺伝学的研究を行った。中国における調査旅行では二つの新種を発見し、自ら命名者になったり、小麦の分類と分布、染色体数の研究などを行っている。しかし終戦後帰国以後、総合的な農業問題が必要となり、農業経済の研究に入り、学位もその方面で取っている。

木原均は、指導教官の立場にありながら、指導教官が学位論文の審査に当たらなかつたのは全く異例のことで、これがはじめにして終わりのことかもしれぬ、学位を得てからは彼は新しい研究の分野で押しも押されぬ人になってしまった、という賛辞を追悼集に書いている。

細野ほど農業の技術と農業経営に通じ、技術的見方や経済的見方を感覚として身につけ

ていた人はすくない。まさに農業総合研究所になくはならない研究者であり、彼の学位論文では、日本の耕耘過程の機械化、さらに農村の電化、すすんでもっと普遍化された技術のあり方の問題も論じられている。

細野の残した遺稿などを集めて、農林省農業総合研究所から一九五九年に、二〇〇ページに及ぶ「小麦経済」という本が出版されている。この本は細野の集めた豊富な統計的資料に基づいて、世界における小麦経済、小麦の需要構造、日本における小麦経済、今後の小麦の日本農業に占める位置などを論じている。当時としては実に先見性のあふれる学術書であった(文献一三)。(細野晏雄氏のご厚意により二冊私に送っていただいた。希望者はお知らせ下さい)

五、おわりに

あまり後輩に知られることのなかった細野重雄であったが、調べてみると登山をはじめ、専門の分野での研究もすばらしい人物であったことがわかる。細野と同時代の人はほとんど亡くなっており、直接彼のひととなりを聞く機会がなかったことは返す返すも残念である。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、細野重雄さん長男細野晏雄さんからは、多くの貴重な文献をお教えたいただいた。氏のご協力で深く感謝する。また岩坪五郎会員から紹介された金沢市長寺三坂岳応さんには晏雄さんに紹介の勞

をとっていただいた。以上の各位に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 一、西堀、奥・春の東沢、三高山岳部報告、第五号
- 二、細野・北岳バットレス登攀、関西学生山岳連盟報告、第一号、一九二九・七(因みにバットレスの名称は小島鳥水による)
- 三、伊藤・ポーラメソドによる富士登山、日本登山記録大成二〇巻、同朋社、昭和五八年
- 四、今西編・ヒマラヤへの道、中央公論社、昭和六三年
- 五、細野・アイとユキシロー山岳語彙小論、三高山岳部報告、第九号、三、一九三一、p.225
- 六、細野・山岳語彙の興味、ケルン、二、一九三三、pp.1-6
- 七、細野・英国の山・谷・峠などの名称、ケルン、一五、一九三四、pp.15-20
- 八、細野・エーリッヒ・マイヤーの著作の翻訳、ケルン、四、五、四八、五一、五三、五七、六〇、一九三三〜三八
- 九、細野・書評、ポルドー「野火」、岳人、四号、昭和二二年
- 一〇、細野・単独行を争う、ケルン、二三、一八三五、pp.1-4
- 一一、細野・高橋健治さんの山、岳人、一〇号、昭和二三年
- 一二、追悼号 故細野重雄氏を偲びて、農林省農業総合研究所月報、昭和三三年七月

一三、細野・小麦経済、農業総合研究所刊行物、一七八号、昭和三四年

五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって(その三)

第二次計画 硫黄岳試登 羅臼岳登頂
知床五〇周年

斎藤惇生

計画予定は一月一〇日までには京都に帰ることになっていた。もう日程の余裕は少ない。硫黄岳班の藤村、山口、斎藤は、手配した船が海が荒れているため来ないので、知床別まで歩いて行くことになった。サポートの脇坂、平井、川瀬と合泊を一月二日の一四時出発。雪のなかほとんど無言のスキーの行進が続く。暗くなって道しるべは波の音だけ。コプカリコタンあたりから風も止み雪も止み月が出て、月下の行進となった。しかしルサ川を渡る時椿事が起きた。以下山口の記述。
「先頭にいた斎藤が土と河辺の薄氷を見違えて片足を水につけた。そこで藤村が少しひき返し川の上をとことこと渡り出した。丁度その真中辺で「岸はどこだ」と言ったのと脇坂が「速く渡れ」と言ったのと、そして川瀬が「あっ、氷が割れる」と叫んだのと殆ど同時に一大音響と共に藤村がザンプと水につかった。すわとばかり薄氷をふむ思いもあらばこそ山口と川瀬で救助にあたる。先ずル



知床半島の最高峰羅臼岳の頂上 巨大な岩峰に雪が固く凍りつき、緩斜面の雪もクラストしてアイゼンが快く利いた。右方に登高する二名の隊員の姿が小さく見える（撮影者 寺本巖）。

ツクをひきづつて岸へ運び、次いで落ちれば諸共と片手で藤村をひっぱり上げ直ちに幸い近くにあった民家へ暖を取りに行った。そこまで一〇〇m位の間に衣類はバリバリに凍ってしまった。（気温は零下一〇度位だった）

氷につかっていた時は暖かかったそ
うだ。これらの凡てが三分位
の間に起こったのである。いづ
れにしる合泊と知円別間で唯一
の民家のそばでこの様な事が起
こったのは全く幸運であった。」
報告第三号 p.36。

藤村、斎藤はその家に泊めて
もらい、他は知円別へ月の光の
なかを進んだ。知円別小学校の
親切な校長先生の家に泊めて頂
く。

一月三日（雪）

藤村、斎藤が一〇時過ぎ知円
別着、平井、川瀬は合泊へ帰る。
脇坂は船の交渉へ羅臼に行く。
山口、斎藤は高度三〇〇mまで
偵察、深い雪に埋もれた平坦な
森林帯だった。

一月四日（雪）

早朝出発、だだっ広い森林帯
を登る。五〇〇m地点で岬隊が
使ったテントをはる。藤村、山
口が偵察、樹木が無くなって巾
の広い傾斜のゆるい雪の尾根が
続き、地形の見当がつきにくい。
六五〇mぐらいいから引返す。

一月五日（雪）

八時、雪のなか青空が見えたので飛び出す。
風強く視界不良。一〇〇〇m近くから晴天と
なる。一二時三〇分主稜線に出た。多分東岳
と知円別岳との間の稜線だった。そこから主

峰までは剣のハツ峰を小さくしたようなナイ
フリッジが続いていた。時間的に主峰までは
困難なので、主稜線に達したことを慰めに引
返す。数少ない赤旗とかすかなシユプールを
たよりに滑り下りた。

一月六日（雪）

三日につけた赤旗をたよりに林間滑降して
知円別に下り、校長先生夫妻に迎えられた。
昼食後羅臼へ向け出発。飛ばしたがサシルイ
で日が暮れ、吹雪にもなつて、難所ローソク
岩の手前のハシコイで高捲きの道が分らず民
家に泊めてもらう。

一月七日（吹雪）

ローソク岩の高捲きのラッセルにうんざり
している所へ脇坂と川瀬が迎えに来てくれ、
昼前に羅臼に着いた。

羅臼岳登頂

一月四日合泊に船がやっと来た。合泊の親
切な人たちに別れを告げて出航。小さい船で
船室が無く、吹きさらしの甲板での二時間半
は恐ろしい寒さでふるえ凍えながら羅臼に着
いた。西井さん方で昼食後一五時頃から羅臼
温泉に向い、暗くなつて到着。当時は菊池三
郎氏の宿一軒だけだった。

一月五日（晴）

羅臼岳班はアタック隊は廣瀬をリーダーに
中川、平井、寺本の四名。サポート隊は岬隊
の脇坂、中島、知床登頂の杉山の三名の編成
だった。

六時ライトをつけて出発。夏の偵察の時の
判断で、温泉の裏の小沢に入り右岸の尾根に

取付く。サポート隊がラッセル。一時間で小さなコルに出たころ天候は久しぶりの快晴となった。尾根は中広い斜面が次第にやせ尾根となった。コンター八〇〇mでアイゼンをはく。少し登った所でサポート隊は引返す。深いラッセル、ハイマツの落し穴にはまつたりしながら順調に登る。広いお伽の国のような盆地を横切り、頂上へ続くドームを一直線に登る。急斜面で膝ぐらいまでのラッセル。最後は雪も固くなりアイゼンがよくきて一五時一五分エビの尻尾に覆われた頂上の岩峰に立った。日は沈みかけており雲海の上に頭を出したチャチャヌプリ、硫黄などの山々がぼら色に美しく輝いていた。寒いのですぐ下りにかかる。間もなく暗くなってライトをつけてゆつくり下る。デポからスキーをはく。あとは盲目滑降。コル近くで隊長を迎え。二一時過ぎ温泉着。案内乗なラッシュタクティクであったと廣瀬は報告している。

一月六日（吹雪）

朝から激しい雪。午前中に羅臼へ返り誠諦寺に到着。硫黄パーティからも無事下山。陸路羅臼に向くと電話連絡があった。しかし夜になって吹雪はさらにひどくなった。脇坂、廣瀬、中島、川瀬の四人がマッカリウスまで迎えに行く。二三時まで待ったが現れないので帰る。

一月七日（吹雪）

脇坂、川瀬が迎えに行き硫黄パーティは無事に到着。昨日に続いて猛烈な吹雪。五日が快晴で羅臼岳に登頂できたのは僥倖というか天佑というか全く好運であった。廣瀬は報告

に「登山の成果は常に僥倖に依って得られるものであり、僥倖を掴むための積極的な努力を常にしてゆかねばならぬものだとも言えよう。」と述べている。一日荷物の整理。梱包。

羅臼脱出

無事一次、二次計画が終り、次の問題は羅臼脱出であった。標津までのバスは運行中止になっている。船で行くことになるのだが標津港はしげ上陸なので波が高いと船は出ない。船が出ず流水が来て海が凍れば越冬せねばならぬ。西井師がそうならならみなに越冬嫁を世話せねばならないと言われる。それも又いいではないかと二寸不埒なことを想像する。

八日晴れていたが波が高く船は出ない。何をして過ごそうと考えている所に村田村長さんから昼食の招待があった。新鮮な海の幸がたくさん用意されていた。なかでも氷った鮭を刺身にしたルイベは絶品だった。口に入れるとアイスクリームを食べている感じで感激した。準備中から禁酒令が布かれていた。久しぶりにお酒も頂きみな楽しく上機嫌になった。

一月九日（晴）

幸い天候が落着き波もおだやかで船がでることになった。早朝まだ暗いなか西井師は港まで見送りに来られた。我々は感謝の気持ちこめて蛍の光を歌った。西井師の協力援助が無ければこの計画は困難が倍増していたに違いない。

流水は知床岬まで来ており、根室海峡の海は氷がただよい、シャーベット状になっていた。船から見える苦闘した知床の連山、対岸

の国後の山々は、我々におおきな満足と郷愁を残して次第に遠くなつて行つた。

知床と伊藤洋平隊長

京都に帰って祝賀慰労のビールパーティがあった。当時四條河原町にあったニユートウキョウであった。岬隊とドッキングした朗報を、寺本、平井がC1にもたらした時、伊藤が靴もはずかにテントを飛び出し踊り出した。廣瀬がすかさずビール二杯を隊員たちにおごる約束を取りつけたのだ。この席に今西錦司さんがふらりと現れた。特に何もしやべられなかつたように記憶している。伊藤が私の耳もとに「ワイさん、今西さんが来たんだぞ」と嬉しそうにささやいた。

戦前旅行部として活動した今西さんを中心にした先輩たちと、戦後山岳部を創設した先輩たちとの関係は余りしつくりしていなかった。今西さんがパーティに来たことは、知床の成功を評価し山岳部の現役を後継者と認めたことになる。伊藤の言った言葉の意味を、私は半年ほどしてアンナプルナ遠征が始まるころやっと理解したのだった。

知床遠征中、伊藤の少し鈍臭い行動、癖のある振舞、スキー下手などが批判揶揄の標的になった。それが逆に隊員たちの結束をたかめる材料になったかもしれない。茶化し批判精神の横溢した大阪出身の寺本が中心になつて作った歌があった。私たちはそれを歌っては笑いこぼした。消え去るには惜しいので寺本に頼んで残すことにした。一、のM社は毎日新聞、歌は当時のラジオの日曜の人気番組、

三木トリローの、「僕は特急の機関手で」の替歌である。

ヨッペイさんの歌

一、俺は遠征隊長で 人も登らぬ知床を
M社とかもりに来たけれど 装備があ
れでは登りやせぬ

ヨッペイ、ヨッペイ、ヨッペイ フ
フフ フフ フフ フンフン

(繰り返し)

二、俺の装備はみな借りもん スキーは愛
宕のオンボロで、
シールがドッグのさかしまじゃあ 逃
げて折れるも無理はない

(繰り返し)

三、広いテントのスペースも 雪を溶かし
たレモンPも

“ダンク、ダンク”で二人前 それで
ボツカは半人前

(繰り返し)

四、もしいち来たらばどうするか 決めも
しないで頼むぞと

シールを逆さにはりつけて C2、C
1とおりてゆく

(繰り返し)

五、遂に握手の捷報に そばの隊員突き飛
ばし

裸足で飛び出す雪の上 ドッスンドッ
スンと踊り出す

(繰り返し)

知床について改めて書いているうちに疑問

に思うことがあった。それは岬に船で上陸して稜線を南下するという海軍陸戦隊的な発想を誰が思いついたかであった。隊員たちに尋ねてみたが分らない。結局偵察を基に伊藤が考えついたのではないかとということになった。我々の後の知床の記録を見ても冬期に船で岬に上陸したものはいない。知床は春のほうがハイマツが雪にしつかり覆われて歩き易い。しかし海は流水に閉ざされて船は使えない。京大山岳部にとって知床の経験はおおきな飛躍台となった。半年後の一九五三年秋のAACKのアンナ・プルナ遠征の準備に、知床の経験がすぐに役に立ったのだった。知床の隊員でその後AACKのヒマラヤ遠征に参加したものは一二名中八名になる。

知床五〇周年

二〇〇二年は知床遠征五〇周年だった。これを記念して羅臼を訪ね、その時お世話になった町に少しでも恩返ししようという企画が持ち上がった。中島道郎の発案だった。

羅臼町、羅臼山岳会に後援をして頂き、一月一日羅臼町小学校講堂でささやかな講演会をした。京都からは一名が行き、元隊員は六名だった。地元湧坂周一氏の知床登山史の詳細な解説の後、廣瀬が計画の発端と概略、中島が岬隊、寺本が本隊の行動を報告した。毎日新聞に掲載された写真のパネルが臨場感を与えた。午後は知床以後のヒマラヤ遠征を斎藤が、高所医学を中島が説明した。

翌日は羅臼山岳会の人たちと羅臼岳を北見側より登り羅臼側に下りた。お世話になった

西井誠誘師のレリーフが頂上近くの岩にあった。西井師は一九五三年に完成した羅臼側よりの羅臼岳への登山道の開削に力を尽くされた。羅臼岳に登頂した隊員は、あの時はこんな大きな山とは感じなかったと述懐していた。これは二〇才代と七〇才前後になった体力の差によるものだろう。一八時から一九時の間にみな疲れはてて羅臼温泉に着いた。スケールの大きさを感ずる山だった。

翌日合(相)泊に行ってみた。平坦とした舗装道路八七号線が合泊まで通じている。車で三〇分ぐらいだった。もう番屋など全く無かった。温泉はあった。小さな卒の中にしよぼしよぼと湧いていた。あまりにも思い出と食違っていて戸迷った。温泉に手を入れて温もりを確かめるだけで止めた。旅行雑誌などに紹介されている日本最北東にある「熊の穴」というラーメン屋に寄った。訪れた人の色紙が壁にたくさん飾りはられていた。新妻日本山岳会北海道支部長と本多勝一のがあった。我々も主人に所望されて書く破目になった。珍しいのでトドの肉のラーメンを食べた。食べながら私は海が干上って桑畑に変わった「滄桑の変」という諺をしきりに思い浮かべていたのだった。

五〇周年参加者

山口 克、廣瀬幸治、中島道郎、斎藤惇生、寺本 巖、川瀬裕史(以上知床隊員)

岩坪五郎、高村奉樹、酒井敏明、上尾庄一郎、潮崎安弘

OKK NEWS, NO. 1

昭和38年

去る6月18日、関電共済会館にて、AAOK時報NO2にも記載のように大阪在住勤などの会員相互の連絡をはかるため、正式にはオ1回の集会がもたれました。今迄にも有志の者が個人数人がう集り米の山、中ア、白馬主峰など山行も、又懇話会なども数回開いた事がありました。組織的に動き出したのはこの日からということになります。参加者18人でした。

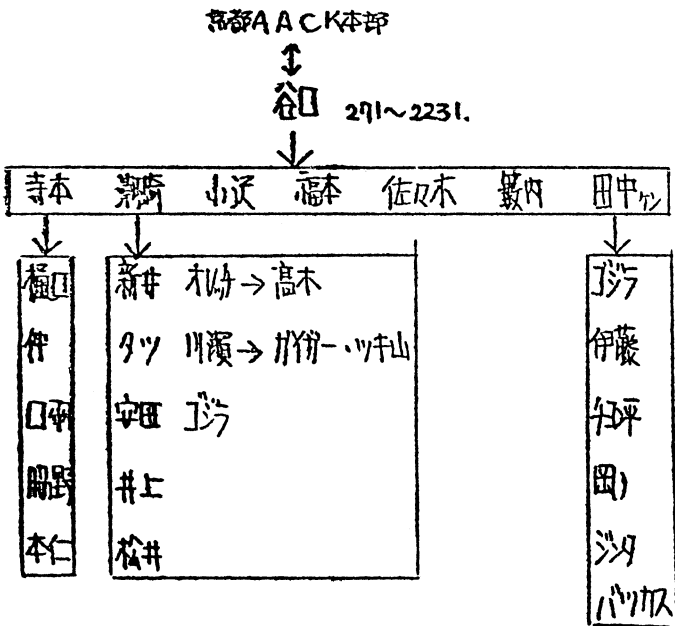
自己紹介のあと、連絡網を作り、例会をどう開くか、京都からどんな装備をかりてくるか、山行はどのような事柄を、なごやかに話しあい、気温の高いやいもあって、心あたまる一夕をすごしました。以下に当日決定された事を記します。

- 1、会の名前、 OSAKA KAYO KAI OKKと仮称、正式名称は10ヶ月後日に。
- 2、会員、 コミュニケーションの便宜をはかるのが、この集会の目的であるから、会費を納める人は誰でも。
- 3、会費、 年額 100円 これ由通信連絡に主としてあてる。会計は田中 健氏。
- 4、例会、 月一回、オ-火曜日 6:30~9:00 P.M. 場所は別記、固定会場はなし。
- 5、NEWS 年2日発行、主として 山行記録をのせる。

7月28日にも、オ2回集会が、同じく関電共済会館でひらかれました。主として夏山計画が話されその場には会場(川)所はないか、とか、魚釣りに行かないか、とか話でした。

以上がOKKのオ1回とオ2回集会のありまです。 決定、別記事項を以下にします。

連絡網、(但し未完成、もれ多く失礼、至急 谷口まで届出られたし。)



藤田 清水 山口 松田

OKK名簿(但し未定成、モロ多く失礼、又希望者も至急 谷口まで御連絡のこと。)

(2)

- 谷口 朗 丸紅飯田(271~2231)木材 京都府乙訓郡向日町西向日 (tel 92~0515)
- 伊藤寿男 日本郵船(3~0601)欧州課 神戸市須磨区関守町、日本郵船関守寮、
- 高野昭吾 住友商事・機材オニ課(203~1221) 高槻市古曾部415 住居寮(9177 5~610)
- 川瀬裕史 森下仁丹(東区玉橋町543)(761~1131) 京都市北野紅梅町2(44~8015)
- 田中 健 堀野教養業 オニ学術部(202~2161) 面宮市大森町128 辺野寮(2~2307)
- 小沢良夫 東洋レーヨン 輸出オニ課(441~7771) 高槻市古曾部 東レ高槻寮(4~1758)
- 福本昌弘 日産設計工務KK 土木業務所(312~9177~9) 京都市北区山崎堀池町15(23~6750)
- 口羽健介 伊藤忠商事 化学品オニ部(271~2251) 大阪市西区新町南通104(531~8354)
- 中田 武 松下電器無線本部研究所(991~1151) 枚方市中振 2.558(寝屋川3~2001)
- 植口明生 京大化研 材料研 試験工場 宝塚市鹿塚 仁川里地12号館302号(西宮5~2501.81)
ミラテ
- 川島眞生 京大防災研(30~563 or 4990) 枚方市中宮オニ住宅3~503(枚方07204~3648)
- 寺本 巖 住友電気工業 研究部 照射研究室(461~1031、内線366) 5830
- 松井敦男 松下電子工業 研究所(高槻6~0521、内線268) 茨木市春日丘オニ三線水園(茨木)
- 津崎かみ 三洋電機 中研(枚方274312) 本社は991~1181 大阪府城陽市門真町上馬伏13の2.
- 佐々木一 関西近畿支社電力課工務係(441~8861) 芦屋市大原町109(2~6602)
- 坂内卓男 協和銀行 望島支店(341~1676)
- 尾崎産業高(481~431.4283.7700)(夏・春休みあり)、尾崎市西大島稲葉荘1丁目69.
- (註、この名簿はオニ1回 集会に出席した者のみので、OKKの正式名簿ではありません)

OKK 装備、(AACKより借用のもの) 管理者 福本昌弘氏、

- | | | |
|--------------|---|---------------------------|
| 1) ギャイル | 2 | 使用希望者は 福本氏に相談の上、同氏自宅まで |
| 2) 夏テント(4~5) | 1 | とりに行くこと。 |
| 3) 冬テント | 1 | 尚 中田さんの方で 試作されたキルティングコートや |
| 4) ツェルト | 1 | テント(?) を 使用していたが)てより、この申出 |
| 5) ミニ道具 | | があります。希望者は 中田さんまで。 |
| 6) スベア(1) | 1 | |

OKK 係

- 連絡責任者 谷口 朗
- 会計 田中 健
- 装備 福本昌弘
- 印刷 坂内卓男(但し試用中で 本採用ではない)

ラビヨウ記

寺本 巖

「OKK」は、一九六〇年代初めごろ、主に大阪に勤務先を持つAACK若手が、京都での木曜会に出席しづらいことから、「大阪で、火曜日に集まる、会」としてできた集まりである。火曜日になったのは、メンバーの一人潮崎が勤務先関電の会議室を提供してくれたからである。

その「OKKニュース No.1」のコピーが見つかった。昭和三八年だから、四〇年あまり前の、ワープロなんぞ無かった時代のガリ版刷りである。なんでも、新井が保存していたらしいのだが、潮崎を通じて「岡山の山に登る会二〇〇五」に披露された。書いた日本人の藪内でさえ覚えがないという。

非常に不鮮明な原コピーを田中編集長・土倉印刷のご努力で、ご覧のように内容の読めるまでに修正していただいた。安田、樋口、口羽などの故人を含めて、ずらりと並んだ名前が懐かしい。

年会費一〇〇円のこの「OKK」は、コミユニケーションの便宜を図ることを目的とするところがある。AACKの情報は、家が京都に一帯に近い谷口が運んできてくれていたと思う。集まって山の話はしたが、「OKK」挙げての山行はなかったようである。実際には、少人数のパーティで、主に五月の連休を利用して、中央アルプス、白馬主稜、黒部源流など

に出かけていた。そんなとき、AACKからの借りものではあるが、ザイル・テント・三つ道具など、福本管理の装備類が役に立った。恒例の水ノ山スキーツアーには、京都からの参加も得て、だんだん盛会になっていった。もつとも、水ノ山の山頂から戸倉までの「ダウンヒル・オンリー」というキャッチ・コピー通りに楽しめたのは初めの一回ぐらいで、あとは悪天候に道標を見失って登り下りを繰り返した挙げ句、とんでもないところへ降りてしまったり、遂にはビバークを余儀なくされたこともあった。「AACKは道標がなければよう行けへん」という自虐的な大阪弁ジョークも生まれた。

いまや「OKK」は、ゴルフの会に变身しているようであるが、原田(道)のホール・イン・ワンがきっかけで、一九九三年のキリマンジャロ遠征隊が生まれたし、一〇年も続いている「岡山の山に登る会」も、そのDNAを受け継いでいるように思う。

嘉友岩倉哲男会員を悼み偲ぶ

松浦祥次郎

三月二日にモスコイでの会議から帰宅した時、留守中のFAXに前日三月一日に岩倉さんが逝去された旨の訃報が入っていた。また、留守電にはもう一人の工学部同期生の、そしてメールに高校同期の友人の訃報が入っていた。なんとも言いようの無い、寂寥と喪失感

に迎えられた帰国であった。

生憎と三日の通夜、四日の告別式の時間には変えようの無い予定が入っており、やむを得ず五日に奥さんと娘さんにお悔やみを申し上げるためご自宅をお訪ねした。岩倉さんは私のことを家で時々話題にしてくれていたらしく、そのおかげで初対面にも拘わらず打ち解けているいと彼の想い出を話し、お世話になったお礼を述べることができた。

彼の病因はC型肝炎ウイルスによる肝障害であった。C型肝炎ウイルスに感染していることはもう二〇年くらい以前に分かったらしいが、その後特段の不調は生じなかった。体に不調を感じるようになったのはこの四、五年だったという。昨年の秋ごろから急に調子が悪くなり、自宅に近い千葉大医学部付属病院に入退院を繰り返すようになった。昨年一二月、応用物理学同期生(東京在住)の忘年会を、彼には珍しく連絡無く欠席したので、「どうしたのか」と気になり何度か連絡を試みたが成功しなかった。正月早々に彼が肝障害で入院し、状況は余り良くないとの知らせを私の職場の知人の医師から受け、驚いて直ぐ一月七日に入院先へお見舞いに行つた。その時は「腹水が溜まるので困っている」と言っていたが、顔色も良く元氣そうに見える、神楽坂にある良いワインケラーを紹介してくれたりした。一週間ほど後に、他の同期の間がお見舞いに行った時も、大変元氣そうで、病院の喫茶室で歓談出来たという。しかし、腹水が溜まるというのは肝臓の機能が相当に低下しているためであり、楽観は出来ない

いうことを知人の医師から聴き心配していた。二月に入り「もう一度見舞いに行こう」と思っていた矢先、彼から正月の見舞いへのお礼が届き「これは？」と彼の氣遣いぶりがかえって気になったが、二月末の外国出張の準備に追われ、再度のお見舞いの機会を失ってしまった。今となつては悔やまれてならない。

同じ時代に山岳部で過ごしたのだが、一緒に山を歩いた記憶はまるで思い出せない。唯一の思い出は、彼の遭難の報を受け、兄（山口克）と八方尾根行き予定を変え、富士山に急行したことだけだ。富士の裾野の夜道の長かったことだけが、思い出される。

この遭難で彼は手足の指にひどい障害を受けた。我々はそれが彼の人生にかなりのハンディキャップを与えただろうと想像する。遭難時のリーダーであった内山敬康氏からは長文の手電が寄せられ、その時以来の重い心掛かりの有り様が切々と述べられていた。ところが奥さんと娘さんのお話では、岩倉さん自身は障害を全く意に介していなかったらしく、不便を口にしたことが無かったという。その屈託の無さは「小さい時には、他の家のお父さんの手も皆同じで、また指が生えてくるのだと思っていました」との娘さんの言葉に如実にうかがわれた。奥さんも「こんなに長い間、内山様が重い気持ちで居られたというのは全く思いも寄らないことで、かえって申し訳ないような気が致します。本人は全く気にしておりませんでしたから」とおっしゃっていた。このような言葉を何かの小説の一

節に読んだ気がする。

あらためて思い返すと、彼とはずいぶん近い間柄で過ごしてきた。大学では教室と山岳部で同じだったので、その後もその関係の付き合いがずっと続いていた。仕事も、同じというほどではなかったが、近いところにいた。

彼は、定年まで科学技術庁所管の国立研究所（現独立行政法人）「放射線医学総合研究所」に奉職し、特に低エネルギーベータ線測定法の研究と開発で日本のパイオニアの役割を果たした。かつての私の仕事場だった東海村の原研にもしょっちゅうのように来ていたことがある。低エネルギーベータ線を出す典型的な同位元素は三重水素や炭素——四であるが、これらは生物学研究のトレーサーとして決定的に重要な元素である。また、炭素——四による年代決定も考古学でよく利用される。ところがこの低エネルギーベータ線——線というのは極薄い紙でも透過できない放射線であるので、正確な測定は極端に難しい。特に有るか無しかの程度の微弱なベータ線源の測定は研究者泣かせの典型である。その高精度測定には、測定試料の調整から測定器系の整備まで、いたるところに徹底的な名人芸の注意深さが要求される。こういう測定にはまさに岩倉さんの真面目が発揮された。彼はこの測定法の「日本標準」を作るのに大きく貢献した。彼の技術は定年後も科学技術庁から頼りにされ、難しい測定や評価の指導をいろいろと頼み込まれていた。

その余得を東京近辺在住のAACK会員は時々受けていた。米軍が沖縄の小島で劣化ウ

ラン砲弾を用いて訓練をしたと言うことが騒ぎになったことがある。劣化ウランというのは元来が放射能を大して有さない元素であり、それが空中・地中に飛び散ってしまうと、それを測定で確認するのは非常に難しい。この測定を彼は科学技術庁（現文部科学省）から依頼され、何度か沖縄へ出張した。彼は自分では酒をほとんど飲まないくせに、必ず泡盛の古酒（クス）を土産にし、それを我が家での集まりにぶらさげて来てくれた。AACKの連中が古酒にいい気分になってワイワイ騒ぐのを、彼は自分では飲みもせず、騒ぐことも無くニコニコしながら、黙って横に座っていた。その思い出を奥様に話すと、「そうなのです。自分は飲まなくても、周りの人たちが楽しくやっていると、周りの人たしくなるのだと申しております」と言っておられた。全く希有な人物であった。

昭和三三年に工学部応用物理学科を卒業した東京近辺在住者達が、そろそろ定年を迎え始めた頃から、三ヶ月毎の第三金曜日に神田の学士会館のレストランに集まり、昼食懇談をするのが楽しみになっていく。この集まりを応物三金会と呼ぶようになり、そのうち、誰が言うとなく三金会で時々近辺への一泊旅行をするようになった。その旅行の段取り一切を岩倉さんが引き受けてくれた。さすがに鉄道友の会の会員であっただけに、「こんなに良い所がこんな近くにあったのだ」と感嘆する景観を南房総に、箱根近辺に、西伊豆に楽しませてくれた。

一昨年の箱根近辺への旅行の後、お礼のメ

ールをすると、折り返し旅行中の写真が送られてきた。それに添えられていた手紙には、「もうそろそろ、他人様のお節介やきをする年令でもないと思うのですが、生来、歩き回りがきらいでない事と、喜んで戴けるとつい嬉しくなってしまう、またぞろ、出しやばりをしたくなる。終生直らない性かもしれません。

忘年会のスナップショットが出来ましたので同封お送りします。

当節、デジカメ全盛の風潮に逆らって、相変わらず塩銀フィルム式レガシー・デバイスを捨てきれず愛用しています。

思い出の一助に役立てて戴ければ幸いです。来年はまたハリキッテ、トラベルエージェンツの真似ごとをやりたいと思いますので御期待下さい。」

と書かれていた。既にその頃は、体調が悪くなり始めていたはずなのに、我々には毫もそれを感じさせることなく、楽しませてくれたのだ。

岩倉さんに案内してもらった良い景色を思い浮かべながら血圧測定をすると、心が鎮まるせい、不思議に低い値に落ち着く。彼の事を想うとひとりで宮沢賢治の詩「雨にも負けず」が浮かんでくる。勿論、彼は「でくのぼう」などではないが、他人の楽しみを自分の楽しみとすることができるような、生来が観音様のような人だったのだ。いずれ私が死の床に着くときには、彼と共に眺めた幾つかの景観がきつと心を安らげてくれる事であろう。

理事会議事録

一、日時 平成一八（二〇〇六）年三月九日（日） 午後一時～午後三時二〇分

二、場所 京都市左京区田中関田町 京大会館二〇三号室

三、出席理事 木村雅昭、前田栄三、上田豊、福嶋義宏、松林公蔵、中川潔、永田龍、吹田啓一郎、竹田晋也、山田和人 以上

一〇名

委任状によるもの

田中昌二郎、横山宏太郎、松沢哲郎、高尾文雄、小林尚礼 以上五名

欠席理事 牛田一成、人見五郎 以上二名

出席監事 西山孝、伊藤宏範 以上二名

四、議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成一八（二〇〇六）年度事業計画について

理事吹田啓一郎によって作成された平成一八（二〇〇六）年度事業計画が説明された。

前年度から始めた第三事業四項の海外登山・探検助成制度を継続すること、第一事業一項（三）の雲南懇話会への運営の協力と支援を次

年度も継続すること、また第四事業一項の会員名簿は隔年発行とするため本年度は発行しないことが確認された。逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成一八（二〇〇六）年度収支予算について

理事竹田晋也によって作成された平成一八（二〇〇六）年度収支予算が説明された。平成一八年から施行される新しい公益法人会計基準に対応した費目の構成に変更されたこと、中国雲南省における梅里雪山隊捜索関連作業ならびに明永村での記念事業に特別会計遠征基金の調査助成金から支出することなどについて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新入会員について

担当者より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

川久保忠通

第四号議案 海外登山・探検助成制度の運用について

寺島彰会員から「川旅・Steinickl」計画の申請があり、運用規程に従って審査委員会で審議し、採択を認めたとの平井一正審査委員長による報告が紹介され、満場一致でこれを承認した。

第五号議案 遠征基金の運用について

特別会計遠征基金の調査助成金に対して、副会長前田栄三より雲南懇話会の趣旨と活動計画が説明され、二〇〇五年度末から二〇〇七年度までの五回の懇話会開催支援のため二五万円の助成が申請され、逐一審議の結果、

満場一致でこれを承認した。また、懇話会の活動成果を会員などへ報告することについての要望が出された。

以上

また、これらの審議事項とは別に次の点について討議しました。

一、梅里雪山峰二次隊捜索に関する小林会員からの報告を確認しました。一昨年から予定していた現地での記念碑建立と明永村への水道敷設費支援は、捜索現場の状況と、明永村および昆明の状況から機が熟したと判断し、今年の秋に実施することに決めました。その実行には岩坪会員、中川理事、小林理事が担当することとしました。また、小林会員から新たに現地活動に関連した費用の申請があり、特別会計の調査補助金の予算枠から支払うことに決めました。

二、内閣官房で公益法人の制度改革法案が検討されていて、これが施行されると一般社団法人または公益社団法人への移行を申請する必要がある、さもなければ五年の猶予期間後に公益法人を解散しなければならなくなるとの見通しが報告されました。当面は一般社団法人への移行を想定しながら、今後の法令の審議状況を見て引き続き方針を検討することを確認しました。

(文責：事務局 吹田啓一郎)

日本山岳協会・山岳共済への加入のお礼とお願い

日本山岳共済の山岳遭難共済にご入会いただいた会員の皆さまにお願いです。

この共済は、しおりなどにも書かれていますように、万一不幸にして登山中に事故に遭遇しても、生きて帰ってくるためにできる限りの備えをすることの一環として用意されている共済制度です。そのため、事故対応として通常の保険では扱われない費用に対しても補償がありますが、この補償を受けるためには加入者が事故を回避するためのできるだけ努力をすることも、同時に求められています。

特に、規定により、よほど簡単なハイキングなどは別として、沢登り、岩登り、泊まりがけの山行などはすべて山行計画書を事前に所属山岳会へ提出して頂くことが求められています。もしも補償の対象となる事故が起ったときに山行計画書が提出されていないと、補償を受けられないばかりか、加入を扱う山岳会であるAACKそのものへの信頼も失うことになり、多くの方にもご迷惑をおかけする結果となります。

AACKでは会員の阪本様にこの山行計画書を受け取る窓口の役目をお引き受け頂いていますので、必ず出発前にお送りくださいますようお願いいたします。

ご加入いただいた会員の皆さまには、この

主旨をご理解いただき、安全な登山を心がけていただきますようお願いいたします。

二〇〇六年二月

AACK事務局 吹田啓一郎

「雲南懇話会」報告と フィールドワークの予定等

二〇〇五年十一月一九日(土)、東京・市ヶ谷の(独)JICA国際協力総合研修所において、第二回雲南懇話会(AACK関東会後援)が開催されました。懇話会には関西から酒井敏明、松林公藏両会員が参加され、学習院大学山岳部員を含む七三名の参加を得て行われました。

懇話会の内容については既にご案内したとおりですが、以下に一部補足して再掲します。

一、トピックス「崑崙の未踏峰(六三四五m) 登頂の概要」——崑崙、その夢とロマン—— 前田栄三 会員

二、「四川省・レッドメイン峰(六一二二m) 登頂の記録と麓の風景」 小川典祐 学習院大学山岳部OB

三、「聖山・梅里雪山の麓の暮し②」——第一回Field Workの報告を含む—— 小林尚礼、安仁屋政武 会員

四、「ミャンマー・カカボラジ峰(五八八一m) 登山の記録と北部の風景」 古瀬泰介 一橋大学山岳部OB

五、「ブータン東部の農民の生活」―民間コンサルタントの調査結果から―

三部信雄 JICA国際協力専門員
六、「ヒマラヤにおける氷河変動」

藤田耕史 名古屋大学大学院
環境学研究所助教

懇話会の終了にあたり、松林会員から講評していただきました。引き続き開催された「茶話会」には約四〇名の方々に参加され、交流を深めました。

第三回雲南懇話会は、二〇〇六年四月一日（土）に東京・市ヶ谷で開催されました。

懇話会は、立教大学探検部員を含む七〇名の参加を得て行われました。演題等、以下のとおりです。

一、「崑崙山脈の未踏峰（六三四五m）登頂の記録（二）」 栗本俊和 会員

二、「GISで見る崑崙、雲南、青海省西寧」―地理情報システムの利用― 前田浩之 会員

三、「聖山梅里雪山の麓から（三）」―山群一周の巡礼― 小林尚礼 会員

四、「東ユーラシアの臍―雲南―」―交易から見た雲南史― 上田信 立教大学教授

五、「ブータンの山と民族事情」 栗田靖之 会員

第二回及び第三回「Field Work」の予定

（概要）は以下のとおりです。

一、第二回 Field Work

・本年五月下旬～六月初旬の約二週間の日程

で、「石楠花」を目的に行われます。

・並河治会員を始め八名の方々に参加され、小林尚礼会員が同行します。

二、第三回 Field Work

・本年一〇月下旬～一月上旬の約二週間の日程で、雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州（州都 景洪）を中心に計画し、タイの古都チェンマイも訪問する予定です。

・参加定員は九名。六名の参加が内定しています。

（文責 前田栄三）

会員動向

編集後記

今回新たに「アフリカ縦断の旅」をご執筆いただくことが出来ました。垂直とあいまって、水平、地平線のユニークな長途の旅であり、三回に分けて掲載させていただきます。お楽しみに。

「五三年前の厳冬期知床遠征：」は今回をもって完結いたします。長らくのご執筆感謝します。今年四月中旬に相泊の「熊の穴」に泊まり、知床岳スキー登山を計画してはおりましたが、ネットで冬眠から覚めた熊の写真を見て中止しました。来年もっと早い時期に思っています。

三月の理事会議事録を掲載するべく、事務局長と図り、例年三月発行の予定を四月発行に変更いたしました。ところが中旬までの発行が出来ず大変遅滞してしまいました。早くより原稿を寄せていただきました執筆者と会員の皆様にお詫び申し上げます。

次号は七月発行の予定で、原稿締切日は六月一〇日です。よろしくお願いいたします。

(田中)



2006年5月1日の笹ヶ峰ヒュッテ

編集委員

田中昌二郎

発行日

二〇〇六年四月末日

発行所

京都大学学士山岳会

〒六二五八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作

京都市北区小山西花池町一―八

(株) 土倉事務所